

漢法苞徳塾資料	No. 100
区分	病因論
タイトル	三因の診別と病理的産生物
著者	八木素萌
作成日	1995.03.31

◎三因の弁別

「三因」について、張機〈仲景〉は『金匱要略』の中で

「……夫レ人稟ノ五常ハ、風氣ニ因リテ成長ス、風氣ハ能ク萬物ヲ生ズト雖ドモ、亦能ク萬物ヲ害ナウ。水ノ能ク船ヲ浮カブルモ、マタ能ク船ヲ覆ガエスガ如シ。若シ五臓ノ元真通暢ナレバ、人即チ安和ナリ、邪風客氣シテ人ニ中レバ多クハ死セン。先般ノ災難ハ三條ヲ越エズ。一ハ、経絡邪ヲ受ケテ臟腑ニ入ル。内所因為リ。二ハ、四肢九竅血脈相傳エ、壅塞シテ通ゼザレバ、外・皮膚ノ中ル所為リ。三ハ、房室・金刃・蟲獸ニ傷ケラル。此ヲ以ッテ之レヲ詳ラカニスレバ、病因ハ都ベテ尽ク。……」（訓読－大塚恭男氏）と述べている。後に陳言が『三因方』で「……オヨソ病ヲ治スルニハ須ラク因ヲ識ルベシ。ソノ因ヲ知ラザレバ病源ニ目ナシ。ソノ因ニアリ、日ク内。日ク外。日ク不内外。内ハ則チ七情。外ハ則チ六淫。不内外ハ乃チ經常ニ背ク。金匱ノ言、マコトニ要道タリ。巢化病源、ツブサニ 1800 余件ヲ列シテ病名ヲ記ス。今コノ三因ヲ以テスレバ病源スベテ尽ク。マタカエッテ約ナラズヤ」と言って、病因に関する説を確立したと言える。

大塚恭男氏は『三因方』の「和刻本」の序文の中で「更に源をたどれば『呂氏春秋』尽数篇の“大甘・大酸・大苦・大辛・大鹹ノ五者、形ニ充ツレバ則チ害ヲ生ズ。大喜・大怒・大憂・大恐・大哀ノ五者、神ニ接スレバ則チ害ヲ生ズ。大寒・大熱・大燥・大湿・大風・大霖・大霧ノ七者、精ヲ動かセバ則チ害ヲ生ズ。故ニオヨソ生ヲ養ウハ本ヲ知ルニ若クハナシ。本ヲ知レバ則チ疾ノ因リテ至ルナシ”があげられよう。」と書いている。

これらは東洋医学の病因論である。つまり、病因を、外感・内傷・不内外因として扱っているのである。

外感……「六淫」に感じ冒された病、外からの病因が病を生起していつものものである。

つまり、体の外に病の原因を為している「六淫」があると見ている。

「六淫」とは「風」「熱」「暑」「湿」「燥」「寒」などが原因となっているものである。

内傷……

不内外因……

◎三因の診別の方法問題

◎病理的産生物とは？

◎痰の診断

◎飲の診断

◎瘀の診断

◎その他の問題